ギデンズのマルクス研究

── 近代社会の構造と変動 ──

宮　本　孝　二

キーワード：ギデンズ，マルクス，階級構造化，史的唯物論，国民国家

はじめに
第１節　マルクス社会理論の全体像
第２節　階級構造論から階級構造化論へ
第３節　史的唯物論と社会変動論
おわりに

はじめに

筆者は 35 年前に修士論文でアンソニー・ギデンズの著作を取り上げて以来，ギデンズ研究を継続し，『ギデンズの社会理論』（宮本，1998）を上梓し，その後もいくつかの論文を執筆してきた。しかし，宮本（1998）においてはギデンズ社会理論の全体像と可能性に焦点を合わせたため，ギデンズが研究した個々の社会学者について丁寧な検討をすることができず，その後もその課題を十分に果たさないまま今日に至ってしまった。そこで新たに「ギデンズと社会学者たち」という研究プロジェクトを開始し，順次ギデンズの社会学者研究について内容を明らかにしていくことにした。マルクス研究を取り上げる本稿は，ウェーバー研究，デュルケム研究に続くその第三作目に

あたる。

本稿では，まず第 1 節において，『資本主義と近代社会理論』（Giddens, 1971＝1977）に収録されたマルクス研究を紹介する。60 年代のギデンズは古典的な社会理論の研究を集中的に遂行し，マルクスについてもその膨大な著作に取り組み，その社会理論の全体像を把握する努力を行い，近代社会の構造と変動の全体的な社会理論の基本構成がすでに初期著作に提示されていたことを明らかにしたのである。

次に第 2 節では，『先進社会の階級構造』（Giddens，1973＝1979）に結実したマルクス研究の意義を明らかにしたい。マルクス主義階級論の固定化され限定的で現実対応性を失った主張を，マルクスの問題提起を現代に生かす方向で刷新しようとギデンズは試みたのである。それが階級を動態的に把握しようとする階級構造化の理論枠組みであり，それによれば階級構造は生産関係のみならず多様な経済的社会的な要因によって生成されるのであり，また階級構造には経済的社会的階級のみならず政治的階級すなわちエリートも含まれているのである。

そして最後に第 3 節において，『史的唯物論の現代的批判』（Giddens, 1981），『国民国家と暴力』（Giddens，1985＝1999），および『左派右派を超えて』（Giddens，1994＝2002）として刊行された史的唯物論の現代的批判について，マルクス研究としての意義を明らかにしたい。それらの連作でギデンズは，資本主義の発展と国民国家の生成との関連について解明することこそ，近代社会の構造と変動の社会理論の核心的課題であると見なし，パワー論を導入することによって史的唯物論を増補することを試みたのである。

なお，ギデンズのマルクス研究の紹介と検討の先行研究には，田口（1994）および田口（1995）や，千石（1997）および千石（2009）があり，本稿もその成果に多くを負っているが，本稿の意義は単なる紹介にとどまらず，ギデンズのマルクス研究の全体を視野に入れ，そこに一貫性と体系性を見いだすための基本的視点を明らかにしたところに求められよう。

第 1 節　マルクス社会理論の全体像

Giddens（1971＝1977）の序文でギデンズは，マルクスの諸著作を内的一貫性をもった総合的なものとして解釈すること，したがって若きマルクスと成熟したマルクスとの二分法はとらないことを基本方針にすると宣言しており，後述のようにマルクス社会理論の全体像を整合的に描き切っている[1)]。

序論でマルクスがドイツにおいて哲学の高度な達成点を示したヘーゲル哲学を批判的に継承しつつ，イギリスの国民経済学やフランスの社会主義の潮流をも踏まえて独自の社会理論を生成したということを述べた後，第 1 章「マルクスの初期著作」ではそれらを丁寧に紹介していく。初期著作にマルクスの社会理論の基本構成がすでに示されていたことは，日本でも 1960 年代には明らかにされつつあったが[2)]，同時期のイギリスにおいてギデンズはその点を明示しえたのであった。そのような視点こそがマルクスの諸著作を，一貫性をもった総合的な全体として把握するために不可欠なのである。

まず第 1 章の序説にあたる部分で，初期著作として『ヘーゲル国法論批判』，『ヘーゲル法哲学批判序論』，『経済学・哲学草稿』を主として取り上げると述べた上で，まず第 1 節にあたる「国家と「真の民主主義」」で，近代国民国家の基本構成として，国家と市民社会との区別と関連を検討したマルクスが，市民社会に渦巻く諸利害が国家によって一般的な共同利害としてまとめあげられるという仕組みをヘーゲルの議論を逆倒させることによって洞察したと述べる。ヘーゲルは一般的利害を真に共同的なものと位置づけたが，マルクスはそれが幻想的な一般性であることを認識したのであった。近

1）第 1 部がマルクスにあてられ，第 1 章が『マルクスの初期著作』，第 2 章が『史的唯物論』，第 3 章が『生産関係と階級構造』，第 4 章が『資本制発展の理論』と構成されている。Giddens（1971：1−64＝1974：12−80）参照。

2）そのような流れの一つの頂点に戦後最大の思想家ともいうべき吉本隆明の 1960 年代に提示されたマルクス研究（『吉本隆明全著作集 12 思想家論』勁草書房，1969 年に収録）があり，その概要は宮本（2011：138−40，232−34）で紹介している。

代社会の構造として国家と市民社会から成る国民国家の本質を洞察することは 17 世紀以来のヨーロッパの社会思想の先端的な流れにあったが，マルクスもまたヘーゲルの達成点を活用してそれを正確に把握していた。これこそマルクス社会理論の全体的構成を示すものであり，初期著作以後は，特に市民社会の運動法則の解明に専念していったのである。

次に第 2 節「革命的実践」では，哲学的批判にとどまらない実践をマルクスが志向していたことが示される。マルクスはヘーゲル批判の潮流が急進的な哲学運動にとどまっていることを批判し，社会変革の実践を目指した。理論的批判が社会の中で革命的地位を取り得る堅固な社会集団と結びつくことによって革命的実践が可能となると考え，それがプロレタリアートの発見につながったのである。

そして第 3 節「国民経済学理論と疎外」では，国民経済学が資本主義経済を最終形態と見なし，経済的関係を人間の媒介とは無関係に抽象的に成立しうると誤認している点をマルクスが批判したこと，その根拠を明らかにする疎外論を展開するに至ったことが示される。労働者はその生産物を他者に占有され生産物への支配力を失い，労働者はすでに労働それ自体からも疎外されており，そのような労働の疎外は階級関係を分岐させ，さらには疎外された労働が自然との能動的な相互関係において成立する類的存在から切り離されてしまう。社会的存在である人間が疎外によって個人的で私的な存在に切り下げられてしまうのである。資本主義の巨大な生産力は，それ以前には不可能であった人間と社会の多大な発展可能性を生み出したが，資本主義的生産が遂行される社会関係においてはその可能性は実現しないというのがマルクスの予言であった。疎外された労働とは，疎外されていない自然の人間と，疎外されている社会的人間との緊張関係ではなく，資本主義によって生み出された潜在力ないし可能性と，まさに資本主義的生産関係においてその実現が妨害されていることの間の緊張関係の中にある。

したがって第 4 節「初期の共産主義概念」でギデンズは，共産主義社会と

は，それ以前の生産体制では不可能であるような形で，個人の固有の潜在的可能性ないし能力を伸ばしていく社会であるとマルクスが明言していたことを示す。人間は集団的産物である諸資源を利用しながら個性化していくが，それは社会を通じてのみ可能になるのであるが，共産主義は個人を抑圧したり規制したりすることのない社会として描かれていた。

以上のように，初期著作にマルクス社会理論の全体的構図が示されていたことを確認したギデンズは，第２章「史的唯物論」の序文で，『ドイツ・イデオロギー』において史的唯物論の一般的考えが概略的に提示され，それ以降のマルクスの生涯はその考え方を理論的に発展させ，実践に適用することに捧げられたと端的に指摘している。ギデンズは『ドイツ・イデオロギー』をマルクスの成熟期を代表する最初の重要な著作と位置づけている。しかし，そこには初期著作との連続性は明らかであるとして，初期著作で先鞭がつけられ後期の著作で具体化した重要なテーマを次のように明らかにする[3)]。第１に，世界史は人間の不断の自己創造であるという視点，第２に，歴史的現象として研究される疎外の概念，第３に，国家と市民社会という構成的把握と国家の廃止の構想，第４に，哲学の拒否と社会的・歴史的分析の中軸化，すなわち史的唯物論の中軸化，第５に，哲学の否定による革命的実践論である。これらはすでに初期著作において描かれていたのであり，ギデンズはここにマルクス社会理論の一貫性を見ている。

まず第１節「唯物論の命題」では，人間の意識は主体と対象との弁証法的相互媒介に条件づけられ，人間は世界に形を与えられつつ同時に世界を積極的に形成していく存在であるというマルクスの基本的視点が示される。歴史は人間欲求の創出，充足，再創出という連続的過程であり，人間社会の発展の研究は，人間存在にとって必要不可欠な社会生活を具体的過程に沿って経

3）マルクスの初期著作と後期の業績に断絶を見る向きは，この『ドイツ・イデオロギー』を後期の始まりとするが，ギデンズは『ドイツ・イデオロギー』が後期の理論展開の出発点と位置づけつつも，初期と後期の連続性を見いだしマルクス社会理論の一貫性を主張したのである。

験的に検証することから始められる。人間と自然の創造的な躍動的相互作用によって人間が自己を作り上げていく過程の研究に支えられた経験的社会科学の必要性が提唱される。ただし，マルクスは社会発展に関する説明を貫いている一般原理を明解に示すが，直線的発展理論を主張したわけではない。

次に第 2 節「階級社会以前」では，近代における資本主義の発展によって階級社会が成立する以前の長期的な歴史過程をマルクスがどう把握したかが描かれる。原初的な社会がようやく部族社会に到達した頃，農耕が発明され定住社会も成立した。そのような部族社会間のコンフリクトや交換を通じて，支配と従属の関係が生まれ古代的な国家が成立する。こうして部族社会から古代社会へ，あるいはまた部族社会からアジア的社会へという大規模社会の成立過程が進行する。なお古代ギリシャやローマでは都市国家が発達し，都市と農村の分化という資本が成長するための歴史的条件が整備され，単に労働との交換のうちにのみ土台をもつような所有の発端が見られたが，私的に占有された富の剰余部分が生産者大衆から離れて明瞭に区別された閉鎖的集団を形成するまでには至らなかった。

そして第 3 節「古代世界」では，マルクスの古代ローマ分析が紹介される。古代社会は契約や征服によって複数の部族が一つの都市に統合されるところから出現するが，そのような古代ローマをマルクスは分析する。人口の増加，軍事的侵略，奴隷の増加，土地所有の集中といった変動過程において地主貴族が支配階級となり，公有財産や軍隊を掌握し，植民地の定期的建設に励んだ。享楽重視の価値観が強く，労働は蔑視され，貴族による平民の搾取は貴族の高利貸資本によって遂行され，平民ないし小農民は破滅し奴隷はますます増加し，ついにはローマ帝国は崩壊するに至った。古代ローマでは生産力の発展は高度化したが，社会の内部構造が発展を妨害するようになった。農民からの土地収奪が資本制的生産への発展につながるような社会構造ではなかったのである。

第 2 章の最終節は「封建制と資本主義の発生」である。封建制から資本制

への移行過程がマルクスの関心事であった。古代社会は都市から出発したが，中世社会では農村を基盤にする中で都市が発達してきた。封建制の解体と初期資本主義の発達は都市の成長と密接に関連している。都市が商業資本を育て，商業の発達は貨幣制度の形成がもたらした貨幣使用の無限拡大によって加速され，都市は商工業の繁栄の中心地となり，自給自足で封建的な農村経済を巻き込んでいった。富裕農民は貨幣によって領主からの負債を決済し自由になり，自由な土地所有農民が誕生したが，彼らから土地を収奪することによって資本の第１次的蓄積が進行したのである。土地所有貴族が交換経済に巻き込まれ，囲い込み運動が生まれ，浮動的流動的な無産の農民集団が賃労働者として市場へ投げ込まれるに至るのであるが，そこに大航海時代の著しい植民地化が重なり，通商の繁栄に伴う資本の流入が進み資本の蓄積が加速した。資本が革命的な力を発揮し，中央集権や強力な政治的権力が発展し，封建制から資本制への転化が促進され，そこにマニュファクチュア生産から産業革命へという大転換が重なった。すなわち機械の発達による機械化の進行，技術改良による一層複雑で効果的な機械の発展が，資本制経済における資本の集中を促進する第１次的要因となったのである。

以上のように，マルクスの史的唯物論は個別具体的な歴史過程への一般法則の押し付けではなく，一般法則に準拠しつつ具体的な歴史的分析を遂行しようとするものであると判定したギデンズは，階級構造論についても同様のスタンスで臨んだ。第３章「生産関係と階級構造」の序文において，人間の生命の生産と再生産により，自らと社会を創造，再創造し，諸欲求や感覚を新たにし，生産力を向上させるが，それは社会的な諸個人相互間の関係においてであるという基本的な視点をマルクスが一貫させていることを確認した後，第１節「階級支配」において，高度な分業の生産関係が搾取関係であれば剰余価値が少数集団に集積され階級が発生するが，階級は所得源泉別の集団ではなく，生産関係の一側面，すなわち生産手段の私有か否かによって成立する階級間の対立関係であるとマルクスが考えていたと述べられる。

そして第 2 節「階級構造と市場関係」で，マルクスにとって二元的階級概念は理論上の構成物であること，現実には諸階級，諸階層，ルンペンプロレタリアートなどが存在するが，それらの過渡的階級は理論上は二大階級に呑み込まれていくと見なしたこと，そして階級関係が基軸となり政治権力が分配されて政治組織の形成がなされると洞察したことなど，マルクスの一連の議論がまとめられる。

さらに第 3 節「イデオロギーと意識」では，近代の法体系ないし裁判制度はブルジョア国家を支えるイデオロギー原理であり，意識は人間の実践に根差す社会的産物であり，言語が実践的意識として自己意識を成立させると考えたマルクスが，イデオロギーはその温床である社会諸関係との関連で分析すべきことを提唱したことが紹介される。イデオロギーは自力で発展しない。一定の実践に伴い社会に生活する人間の意識の要素として発展していく。マルクスの強調点は諸個人が活動する社会的状況は彼らが生活している世界の認識の母体となること，すなわち言語が人間の意識を形成すること，および階級社会においては支配的な思想は支配階級の思想であること，すなわち意識ないし観念の伝播は経済力の配分に左右されるということである。支配的イデオロギーは自らの普遍性を主張するが，生産関係が生産力増大の障害になると，生産関係に基づく階級関係におけるイデオロギー対立が激化する。資本主義の発展に伴って，階級支配から自由な合理的秩序のもとで疎外された自己を回復することが一層求められるようになるからである。

マルクス社会理論の全体像の解明を進めるギデンズが最後に取り組むのが資本主義のダイナミクスであり，それが第 4 章「資本制発展の理論」である。その第 1 節に当たる「剰余価値論」でギデンズは，経済学的運動法則を詳細に紹介する。交換価値の基礎は抽象的労働，使用価値の基礎は有用労働であり，抽象的労働は社会的必要労働時間であること，需要は価格に影響を及ぼすが価値は決定しないこと，商品は具体化された社会的必要労働時間を基準に交換されること，労働力という商品は市場で売買される自由な労働力

であること，その生産に必要な生活必需品を生産する社会的必要労働時間がその価値を決めること，剰余価値は利潤の源泉であり必要労働と剰余労働との比率が剰余価値率ないし搾取率であること，労働者は生活費に等しい価値の生産物より一層多くの生産物を生産可能であるため剰余価値が生まれること，可変資本が価値を創造すること，可変資本に対する不変資本の割合が資本の有機的構成であること，不変資本の割合の低下とともに利潤率は上昇することなど，資本制経済の動きを基礎づける原理を記述する。そのような資本制的生産に内在する運動原理が資本制経済の基盤条件自体を掘り崩すとマルクスは主張したのである。

次に第２節「資本制的生産の経済学的「矛盾」」では，マルクスがその矛盾をどう考察していたかが説明される。利潤追求は資本主義の内在的特性だが，利潤率の傾向的低下が構造的特質であるという利潤率低下法則と資本の有機的構成の分析とが統合され，剰余価値理論とも関連づけられる。利潤総量は剰余価値に依存し，利潤率は資本の有機的構成とは逆方向に動く。生産の機械化による利潤競争は，資本の有機的構成を高度化し，平均利潤率の低下を招く。そこで労働からの搾取が強化され，労働日の延長と労賃の切り下げが実施され，こうして周期的恐慌が訪れる。ただし資本主義は人間の歴史において，大量の余剰生産が可能となる初めての体制であり，過剰生産，利潤率の低下，投資の減退，労働者の解雇，恐慌，そして恐慌期の非効率的企業淘汰，新たな拡大期という過程から明らかなように，恐慌は資本主義の崩壊ではなく定期的変動の体制調整メカニズムと見なしうる点が重要である。

そして第３節は「受救貧民化」の命題，すなわち窮乏化についてのマルクスの議論の紹介である。ギデンズはマルクスが資本主義の最終的大恐慌についてどこでも語っていないことを強調する。マルクスは資本家階級と労働者階級の所得の相対的差異の増大と，資本主義の発展が一層大きな産業予備軍，相対的過剰人口，慢性的失業者群を生み出し，その大多数は極度な貧困に陥ることを理論化したが，労働者全体が窮乏化すると言っているわけでは

ない。

第 4 節は「集積と集中」，すなわち資本の独占と巨大化の理論の説明である。資本の有機的構成の高度化を通じて，個別資本は集積され巨大な資本に併合されていく。巨大資本は価格競争に耐え一層併合を進める。信用制度ないし銀行活動が集中を一層促進する。そのような資本の運動による資本主義の発展は労働者階級の階級的自覚の高まりを促進し，それと連動して革命的実践を通じて社会変革を行うに必要な能動的意識を創出する。なお労働者階級の相対的貧困と産業予備軍の絶対的貧困は区別されなければならない。ただし，恐慌期の失業増と賃金切り下げは革命の温床となる。利害の共同性の認知が進み，集団組織化の基盤が強化される。このように資本の集積と集中は労働者階級の革命的パワーを成長させるのである。

最終節「資本主義の止揚」で示されるのはマルクスの社会主義社会への展望である。資本主義が推進した生産の社会化は私的所有の終焉によって完成される。人々は自らが費やした労働と等しい量の消費手段を支給される。そのような社会主義社会では社会的必要を満たす支出も行われるが，国家は社会に完全に従属する機関となる。いわゆるプロレタリアート独裁の段階を経て，生産と分配の集中化の完成と共に，国家は廃棄される。ただし廃棄は根絶ではなく，行政が社会に従属させられることである。国家的機能は必要であるが，市民社会の矛盾，疎外を解消するかのような幻想的共同性としての，市民社会から分離して存在する国家は消滅するのである。そしてそこでは分業の廃棄が可能になる。生産の機械化の拡大が分業の止揚を可能にする。資本主義がもたらした生産力の向上，分業の発展，交換関係の世界化，国民的編成などが歴史上初めて人類全体を単一の社会秩序内に登場させ，世界史的な存在としたのである。

以上のように，ギデンズはマルクス社会理論の全体像を描き切り，それらについて重要な知見を把握した。それではここで，あらためてギデンズによるマルクス社会理論の総括の要点をまとめておこう。

第１に，初期著作の段階においてマルクスはすでに生涯を通じて獲得していく近代社会論の全体像を基本的に描き切っていた。国民国家における国家と市民社会という基本構成，市民社会の矛盾，それがもたらす疎外を解消するかのような幻想的共同性としての国家の成立という近代社会の一般的構成を明確に把握した上で，市民社会の運動法則としての資本主義論を探究し，その背景に史的唯物論を置き，さらに生産関係に基づく階級構造を市民社会の構成として把握していた。

第２に，史的唯物論は歴史の一般的法則としてではなく，歴史的分析の導きの糸，方法論として位置づけられており，進化論的理論として構想されていたわけではない。

第３に，階級関係ないし階級構造は，生産関係を基盤として成立するが，諸階級諸階層の存在が前提であり，それらが資本主義の運動法則によって次第に二大階級に収束していくとマルクスは見ていた。生産関係を基盤としつつ意識も含めたその他の諸要因の作用によって諸階級が生成される過程こそが重要であり，それによって生成される市民社会の構造に国家が加わって現実の階級構造が成立するのである。

第４に，資本主義は生産の社会化を実現していく過程において定期的に変動するとマルクスは指摘していた。その変動とは資本主義の矛盾が恐慌として現れ，恐慌を通じて資本主義は高水準となり，さらにまた次の恐慌が訪れるという繰り返しであり，大恐慌で資本主義が滅亡するというシナリオではない。むしろ資本主義の高度化ないし生産の社会化の高度化こそが，社会主義社会実現の可能性を準備すると主張したのである。ここからギデンズは，いわば資本主義革命ともいうべき変動過程を把握しえたと言えよう。

ギデンズがマルクスの著作研究によって獲得した以上の知見は，ギデンズのその後の社会理論の展開に活かされていく。第２節および第３節でその点を明示することにしよう。

第 2 節　階級構造論から階級構造化論へ

Giddens（1973＝1979）は，Giddens（1971＝1977）のマルクス社会理論総括の成果を活かしつつ新たな視点を導入して構築された画期的な階級構造論である。マルクスの階級構造論が，生産関係を土台にして階級構造が成立するという点を基本認識としていたこと，究極的に二大階級に帰着するまでのダイナミックな過程のありかたを重視していたこと，その構造形成の過程において階級意識の諸相も作用していると見ていたことが，Giddens（1971＝1977）では確認されていたが，Giddens（1973＝1979）はそれらに基づき，階級構造の生成に作用する要因は基本的には生産関係であるとしても，階級意識も含めたその他の社会経済的な諸要因の作用もまた重要であること，また階級構造には社会経済的な階級のみならず政治的な階級すなわちエリートも含まれることを明示する階級構造化の理論を提示したのであった。ギデンズは 70 年代後半には一般的社会理論としての構造化理論を提唱し，その構築を推進することになるが，その構造化というアイデア自体，階級構造化論を源泉としていたのである[4)]。

それではまず階級構造を動態的に把握する構造化の理論枠組みを概観し，さらにそれが国家論を組み込むことによって全体的な理論枠組みになるという点を，ギデンズの記述にしたがってまとめることにしよう。

前述のようにギデンズはマルクスの生産関係と階級構造という視点を継承するが，生産関係は階級構造の基軸であるとしても，それだけでは階級構造は成立しないとする。階級構造が生成するためには次のような社会経済的な諸要因が作用しなければならない[5)]。

4）ギデンズの構造化理論と階級構造化論の関連，および階級構造化論の概要については，宮本（1998：24–38）および宮本（2009：151–60）で示した。本節はそれらを下敷きにしている。

5）以下，階級意識の段落までの記述内容についてはGiddens（1973：107–11＝1977：105–9）参照。

階級構造の生成過程の出発点に置かれるのは，生産関係と直結した階級構造である。この不平等構造を成立させる要因は，市場能力（market capacity）の差異である。市場能力とはパワーの特殊形態であり，市場は1つのパワー構造をなすとギデンズは考える。

パワーを，相互作用における資源の動員による自己の意図の実現能力と規定するならば，市場能力は，市場の相互作用における資源の動員による自己の意図の実現能力となる。市場の相互作用とは交換であり，その市場は産業社会の市場である。産業社会とは，「市場価値を有する財の生産が経済において支配的となるに至った社会秩序」とされる。ギデンズはマルクスにならって，産業社会の市場交換の特質を労働力商品化に求める。人間の労働力自体が商品として，市場で交換の対象となることこそ，産業社会の市場交換が他の歴史的社会のそれから区別される特質である。注意すべきは商品となるのは労働力であって，決して人間そのものではない。人間はあくまで「自由」であって，市場に自己の労働力を商品として持ち込み，それと他の商品との交換を意図するのである。すなわち人間は自己の労働力という資源を動員して，他者所有の資源との交換を意図すると見なすことができる。もちろん市場交換の場に持ち込まれる資源は，労働力だけではない。何よりも資本がある。労働力も資本の一つと言えるが，資本の所有は労働力商品を購入する市場能力である。

以上，ギデンズのパワー概念を基礎に，パワーの特殊形態として市場能力を規定し，それを構成する2つの要因，すなわち労働力の種類と資本所有量を指摘した。労働力は限りなく分類可能であるし，資本所有量はどのようにも区分できるので，実に多様な形態を，市場能力は取りうるのである。しかしギデンズは産業社会における主要な市場能力として，次の3つを設定する。生産手段の所有，教育上または技術上の資格の所有，肉体的労働力の所有がそれである。彼が市場能力をこの3つに限定しているのは，産業社会の主要階級といわれる（イギリス社会に典型的に示される）上層階級，新中間

階級，労働者階級からなる階級構造の構造化の検討に焦点を合わせているからであり，市場能力が 3 つの種類しかないとか，3 つの階級しか存在しないと主張しているわけではない。分析の焦点に応じて，階級を区分する市場能力のさまざまな形態は選択されて良いのである。

次に問われるべきは，階級間の関係の規定要因である。市場能力の差異とそれがもたらす所得格差によって成立した経済諸階級は，さまざまな社会的場面で相互作用を形成するので，そこに階級関係が生じる。階級関係の規定要因は，それらの相互作用のありかたにほかならず，ギデンズはこれを限定的構造化（proximate　structuration）の要因とよぶ。限定的（proximate）と表現するのは，その構造化が階級それ自体の存在の生成ではなく，階級関係の生成に限定されているからである。ただしギデンズは前述の三大階級の関係を分析の対象としているので，それらにかかわる要因のみを挙げている。企業内部における分業関係，企業内部における権限関係，分配集群による影響力がそれである。

企業内部における分業とは，企業すなわち生産組織内部において職業上課せられる仕事の配分である。そこで最も重要なのは生産技術によって労働条件が区別され，異なった労働環境が形成されて成立する分業関係である。次に企業内部における権限関係とは，企業における権限の不平等配分に基づく命令と服従の関係である。最後に分配集群による影響力とは，消費において異なった形態を有する諸集群によるもので，重要なのは居住地域の差異による影響力である。これらの要因の具体的なありかたが階級関係のありかたを規定するのであり，ここにさまざまな資源に基づく階級パワーの相互関係が成立する。

次に階級自体の再生産を規定する要因について見てみよう。ギデンズはそれを媒介的構造化（mediate　structuration）の要因とよび，階級間移動の閉鎖性の程度を考えている。階級間移動は世代内および世代間のそれであり，配分された諸資源を動員しての階級成員の行為がそれを実現する。世代内階

級移動の閉鎖性は各階級成員の生活経験の同質化を促進し，世代間階級移動の閉鎖性はそれを再生産することになる。

さらにマルクスも自覚していたように階級意識の作用も階級構造の生成に大きな影響を与える。ギデンズは，他階級との関係の認識を含むか否かを基準にして，class consciousnessとclass awarenessに区別する。前者を階級関係意識，後者を階級特有意識と命名しよう。階級関係意識はさらに，次の3つに分けられる。他階級と区別される自己の階級の認識である一体化意識，他階級との利害対立の認識である対立意識，階級構造の変革の可能性と，階級運動によるその実現可能性の認識である革命意識である。階級特有意識は，階級特有の人生観や社会観などであり，階級特有の子どものしつけ方に見られる意識なども含まれよう。なおギデンズは，階級意識に加えて階級イデオロギーの存在も指摘する。それは階級意識のイデオロギー的側面であり，階級構造を自然的なものと解釈したり，階級特殊利害を社会的に普遍的な利害と解釈したり，階級構造に含まれる矛盾を無いものとしたりするような解釈図式である。

階級は経済的階級だけではないことも重要だ。政治的権力の有無が基本的要因となるエリートと大衆という構造は，政治的階級の存在を示す。マルクス以来の階級理論史は，多様な展開を見せてきた。しかしその多様さは同時に混迷でもあり，部分的な階級現象の一面的な強調に終始する傾向を，階級諸理論はややもすれば持ちがちであった。ギデンズの階級理論は，それらを総合した理論枠組みであり，それはまたマルクス初期著作に明示された市民社会と国家の基本構成に基づき，政治的階級の存在を見逃してはいない。以下，ギデンズの政治的階級論ないしエリート論を紹介しよう[6)]。

エリートは，公式的に制度化された権威（権限），すなわち公式権威（権限）の不平等配分によって成立する。ギデンズは「社会組織あるいは制度に

6）ギデンズのエリート論についてはGiddens（1973：118−24＝1977：117−24）参照。

おいて，公式権威（権限）を伴う高い地位を占める人々」をエリート集団とよぶが，それを単にエリートとも表現する。ただし，エリートは一つの集団とは限らず，そこには諸領域における複数の集団が含まれる。また，ここでいうエリートは国家組織，国家制度に限らずあらゆる大規模組織集団において存在しうるが，それらエリートの全体構造が想定されているのである。

「高い地位」とは曖昧な表現にすぎるようだが，それは公式組織の重要な意思決定に参加する権限を有する地位である。この地位に就く人々がエリートであるが，エリートと対比される非エリートないし大衆との関係が構成する基本的な構造が，実体的なエリート・非エリート構造に生成していくためには，エリート・非エリート関係のありかたを規定する要因が必要になる。エリートは権限を基軸に諸資源を動員して政治的パワーを行使し，非エリートもまた権限はもたないとしても，その他の諸資源を動員しパワーを行使しうる。このように両者がパワーを行使し合う「コントロールの弁証法」を通じて，エリートの実効的パワーが形成され，エリートへのパワーの集中度が確定される。また集中度と並んで，エリートのパワーがいかなる問題の解決のために実効的に行使されうるかという問題の範囲の広さ，すなわち争点網羅性も，実効的パワーのありかたを規定する。このパワーの集中度とカバーする問題範囲の広さという二つの要因を組み合わせて，ギデンズはパワー構造の四つの類型を提示する。集中度が高く範囲の広い独裁制的パワー，集中度は高いが範囲は狭い寡頭制的パワー，集中度が低く範囲の広いヘゲモニック・パワー，集中度も低く範囲も狭い民主制的パワーである。

さらに「パワーの制度的媒介」として，エリートの再生産要因である世代内および世代間移動の閉鎖性の度合いと，内部の統合性や連帯性の高さをギデンズは指摘する。特にエリート内部に婚姻などを通じた高い統合性がある場合，エリートの閉鎖性はさらに高まろう。ギデンズはこの移動と統合を組み合わせて，四つのエリート形成体の類型を提示する。閉鎖的で統合度の高い均質的エリート，閉鎖的だが統合度の低い確立的エリート，開放的だが統

合度の高い連帯的エリート，開放的で統合度も低い抽象的エリートがそれである。

このエリート形成体の類型と，先のパワー類型を組み合わせることによって，ギデンズはエリート類型を設定する。均質的ないし確立的エリートと独裁制的ないし寡頭制的パワーの組み合わせが支配階級であり，同じく均質的ないし確立的エリートであってもパワーがヘゲモニックないし民主制的の場合は統治階級とよぶ。また，連帯的エリートと独裁制的ないし寡頭制的パワーの組み合わせがパワー・エリートであり，抽象的エリートとヘゲモニックないし民主制的パワーの組み合わせが指導者集団と命名される。

以上がギデンズの階級構造化論の基本的な枠組みである。1970 年代前半にはマルクス主義の影響力はまだ大きかったため，二大階級が存在するかしないかをめぐる不毛な議論が横行していたが，ギデンズはマルクス社会理論の研究の成果を活かし，生産関係を前提としつつも社会経済的諸要因が多角的に作用することによって生成される階級構造を現実に即して経験的に解明しうる枠組みを提示することに成功したのであった。さらに，社会経済的な階級とは関連しつつも区別される政治的階級すなわちエリートの存在を見逃すことなく，現代社会の階級構造が社会経済的な階級構造とともに政治的な階級構造をも包含していることを明らかにしたのであった。それはギデンズがマルクスの初期著作に見出した国家と市民社会の基本構成にも対応しており，社会経済的階級構造が市民社会の中心構造であるとすれば，エリートこそ国家の実体的な構成要素となっているのであった。こうしてギデンズはマルクスの階級構造論の原理的立場を基底に据えつつ，経験的な階級構造論を各国の現実に即して解明していく道を指し示しえたのである。

第 3 節　史的唯物論と社会変動論

Giddens（1971＝1977）でマルクス社会理論を総括し，それに基づいて Giddens（1973＝1979）によって，マルクス社会理論の現代的な継承の試み

を行ったギデンズは，さらにGiddens（1981）において，マルクス社会理論というよりマルクス主義社会理論の根幹にある史的唯物論を増補した社会変動論の構築を開始した[7]。

前述のようにギデンズはマルクス社会理論の全体像について，マルクス初期著作の総括によって明確に把握していた。近代の国民国家の生成という変動過程の中で国家と市民社会という全体的構成が成立しつつあることをマルクスは洞察し，その上で市民社会が資本主義の発展を基盤としていること，そして資本主義を先端とする歴史を貫く一般的理論法則として史的唯物論が成立することを唱えたのであった。しかし，史的唯物論は資本の革命的パワーに焦点を合わせており，国家パワーやそれを基軸に政治領域を生成する階級運動等の諸運動のパワーについては捨象している。そこでギデンズはパワー論の導入ないし組み込みによって，史的唯物論を増補する試みを開始したのであった。その試みは史的唯物論を社会発展の進化論的単線的図式と見なす視点への批判，さらにはまた生産力と生産関係によって構成される生産様式，すなわち土台がもつ社会構造や社会変動に対する規定性の相対化につながっていくのである。

ギデンズによれば，パワーには社会的世界を支配するパワーと物質的世界を支配するパワーがあるが，資本主義社会以前の社会では権威資源に基づく人間コントロール・パワーが主導的な位置を占める。すなわち，それらの社会のありかたを規定するのは生産力ではなく，政治的なパワーであるというわけである。国家パワーの発生自体が，物質コントロール・パワーの差異によって成立する階級対立と階級支配の帰結として発生したというよりは，権威資源にもとづく人間コントロール・パワーとして，まず発生したと見られるべきであるとギデンズは主張する（Giddens，1981：49−68）。

余剰生産物の搾取は権威資源に基づいているため，資本主義以前の諸社会にも階級は存在していたが，私有財産によって産出される経済的パワーによ

7）その概要は宮本（1998：50−59）で紹介した。本節はそれを下敷きにしている。

る階級支配は，いまだ社会の構造原理とはなっていなかった。それらの社会には，都市国家や帝国や封建的社会などの諸形態が属するが，それらは部族社会以降に時系列的に現れたのではなく，多元的な発展形態なのであり，同時代において社会間システムを形成した。やがてその一角である西欧に資本主義が発達し始め，資本主義社会が成立するに至る（Giddens，1981：69−108）。

資本主義社会のパワー論的特殊性は，配分資源に基づく経済的パワーが主導的なパワーになったということではない。政治的パワーが後退し，自由競争市場とそこにおける経済的パワーが前面に出て来たのではなく，国家パワーと階級パワーの分離が生じたのである。資本主義以前には融合していたそれらのパワーが，国家パワーによる暴力の独占と，資本主義的労働契約による経済的パワーの相互コントロールの場の確立によって，各々独自の活動領域を確保して分離したのである。こうして政経分離が生じるゆえに，資本主義社会においてさえも，基本的には配分資源にもとづく階級パワーが，絶対的な主導権を握ることはない。しかし逆にそれゆえにこそ，資本主義以前の社会とは異なって，階級パワーが，したがって資本−賃労働関係が，さらに言うならば生産力と生産関係の弁証法や，社会的生産と私的領有の矛盾が，独自の規定力を社会に及ぼしうるのである（Giddens，1981：109−28）。

史的唯物論の批判を通じてギデンズが強調しているのは，国家パワーの社会分析における重要性であった。政経分離という特性を示す近代，あるいは現代の先進的な社会の分析は，国家パワーと階級パワーを基軸とする。社会は時間的空間的構成をもったシステムとして成立しているが，成立の要因は支配であり，支配は前近代にせよ近代国民国家にせよ国家パワーによって実現する。パワーが時間的空間的構成を成立させ，パワーの及ぶ範囲が時間的空間的遠隔化によって確定される。時空遠隔化はパワーの生成と密接に関連している。パワーの生成，したがってパワーを基礎づける資源の生成によって，社会が時空の広がりをカバーしていくことが可能になる。遠隔化が資源動員可能性によって実現し，逆に遠隔化によって資源動員可能性を実現す

る。そのような社会は歴史の中で変動する。社会は単数ではない。遠隔化と遠隔化とが激しく接触し，巨大な遠隔化が小さな社会を呑み込んでいく。社会間システムも発達し，それが世界システムにまで至り，その発達において諸パワーの遠隔化の激しい接触の中で近代国民国家が登場した。資本の運動はそのような時空遠隔化の波に乗り世界的規模で展開されるに至ったのである。社会の歴史は単純な類型から複雑化していく過程ではなく，中心的なパワーによる時空遠隔化が進行していく歴史である（Giddens，1981：26−48）。

以上のように社会変動の歴史を概観するなら，史的唯物論の進化論的発想に対しても代替的な考え方が示されることになる。社会が単純な類型から複雑な類型へと内在的要因によって変化するという発想は否定される。時空遠隔化による諸社会の成立と展開は，諸社会にとって外生的な変動要因のもつ重要性を高める。それがギデンズのいう時空エッジであり，社会間システムであり，世界時間という歴史的意識なのである（Giddens，1981：157−69）。時空エッジは時空遠隔化の接触し接合する場であり，それによって社会間システムが生成する。パワーを担う主体はそのようなシステムの生成の歴史と現在を意識し，それらを反省的に把握することによって運動を選択するのであるが，そのような歴史的意識こそ世界時間なのである。また，ギデンズは変動のエピソード，ないしエピソード的な推移による変動の累積が歴史的変動の内実であることを強調し，多元的な社会発展過程という視点を導入したのである。

こうしてギデンズは近代国民国家の全体像の把握に取り組むことになり，まず国家パワーの対内的なありかたを，特に監視や自律性という概念を中心に分析する。国家パワーは情報の蓄積と社会成員の活動の調整を起源としている。しかし，資本主義社会以前の階級分割社会では，社会の統合手段である時空遠隔化は存在の直接性に主に依存しており，したがってコミュニケーションの能力も速度も低いため，情報蓄積や活動調整に基づく監視能力は低度にとどまっていた。この監視能力が，資本主義の発達とともに飛躍的に増

大するのは，第１に，政経分離による国家官僚制の組織的拡大と整備によってであり，第２に，技術発達による情報コントロール能力の増大によってである。監視能力の向上は，言うまでもなく国家パワーの基礎となる権威資源を増大させることになるが，その増大の要因には，政経分離に由来する国家の暴力独占も数えられる（Giddens，1981：203−29）。

西欧の先進諸社会における資本主義の発達は，諸社会間の経済的相互依存性を高め，また国家によって独占された暴力は，対内的のみならず対外的にも使用されたため，社会間システムが発達した。ギデンズはウォーラーステインにならって，それを世界システムとよぶが，次のような留保をつける（Giddens，1981：196−202）。第１に，ウォーラーステインは，資本主義が発達する以前の社会にも世界システムを認めるが，それは誤解を招く用語法であり，その名称は，資本主義の発達によって諸社会の経済的相互依存性が高められた近代ないし現代世界に限定されるべきである。第２に，ウォーラーステインは世界システムとしての経済的秩序を基本としているが，政治的あるいは軍事的パワーの世界システムの自律性をも考慮すべきである。第３に，ウォーラーステインは現代の世界システムが資本主義的であるとするが，そこには資本主義社会はもとより，国家社会主義社会，発展途上国，階級分割社会，部族社会などが併存していることが強調されねばならない。ただし，近代ないし現代社会は世界システムの中で国民国家として成立したのであり，それは社会間システムにおいて生成し存立せざるをえなかった。ここにネイションやナショナリズムの問題が見いだされる。

ネイションとは国民であり，国民国家の成立は資本主義の発達と深く関連している。これはすでに産業社会論の強調するところであったが，そこでは国民国家の概念とナショナリズムの概念が等置され，ナショナリズムの暗黒面が軽視されることになり，また，西欧の歴史的経験の軽視によって，それが一面的に普遍化されたとギデンズは指摘する（Giddens，1981：191−6）。ナショナリズムと国民国家との区別を曖昧なままにするならば，国民国家の

利害として一部エリートの特殊利害が表出される場合，それがあたかも国家の一般利害であるかのように幻想させる働きを，ナショナリズムがもつことを見逃してしまう危険性が生じる。また，ナショナリズム運動は西欧内部においてさえ多様であり，ましてや西欧のそれをナショナリズムの一般モデルとすることなど不可能なのである。

こうして国民形成の運動と資本主義の発達とが連動して近代国民国家が生成したのであるが，それらは当然ながら同じ資本主義国家ではない。単一の資本主義国家があるのではなく，実在するのは資本主義諸国家である（Giddens，1981：209−14）。そのような留保を付けた上で，その一般的特性を上げるならば，第 1 に，支配階級のパワーは基本的に配分資源に依存しており，支配階級と国家パワーの担い手は必ずしも同一ではないということである。逆に言うと，資本主義国家は搾取過程に依存してはいるが，それを直接的にコントロールできないということである。第 2 に，資本主義国家はいわゆる市民権を普遍化する方向をめざす。マルクス主義的な考え方からすれば，このブルジョア的権利の普遍化は，ブルジョア的な政治的欺瞞性の現れとされるが，そのように始末してしまうことはできない。第 3 に，第一点から生じる問題を解決するために，いわゆる国家介入が行われるということである。ただし，それは独占資本主義期に初めて現れた現象ではなく，資本主義の発達の初期からのものである。しかも，国家パワーによる市民社会への介入は，経済的な領域に限定されているわけではない。

また，ギデンズによれば国家パワーは独自の利害に基づいているのであって，資本のパワーから自律性を保つのみならず，経済的土台に独自の見地から介入する（Giddens，1981：214−17）。その独自の見地とは，社会化された生産と私的領有の矛盾という資本主義の主要矛盾に対し，その激化を諸政策で未然に防止しようという観点である。国家パワーは，何らかの階級の利害を代表せず，市民社会の調整・管理に自己の利害を見いだす。しかし，これは国家パワーが準拠する利害が共同利害であることを意味しない。利害の

実質がどうであれ，国家パワーはその利害を共同利害として表現し，自らもそう考えさえする点が重要なのである。

もちろん国家パワーは諸階級のパワーとの相互関係において何らかのコントロールを受けざるを得ない。この意味では支配階級のパワーからは自由ではないが，同時にまた労働者階級のパワーからも自由ではないのである。その端的な表れとしてギデンズが挙げるのは，市民権の普遍化である（Giddens，1981：221−9）。それはブルジョア的な欺瞞性の表れにすぎないわけではなく，労働者階級やそれと連帯する政治団体の運動による，長期にわたる支配階級や国家との闘争の成果なのである。政治的自由を保障する政治的市民権を手掛かりにして，経済的さらには社会的市民権へと権利獲得を進めてきた階級運動があってこそ，国家はそれを保障せざるをえなくなるのである。逆に言えば，労働者階級のパワーが弱体化すれば，市民権の保障は危うくなるだろう（Giddens，1981：226−29）。

支配構造の再生産は，パワー関係を媒介にして実現されるのであり，その関係は多くの場合，利害対立すなわちコンフリクトを含んでいる。コンフリクトが顕在化すればパワー関係は闘争となり，その帰結として支配構造は存続しもすれば変容しもする。資本主義の主要矛盾が存在する限り，その解決をめぐる闘争は絶えることなく，近代ないし現代社会は変革の可能性を常に孕んでいるということができるだろう（Giddens，1981：230−36）。そして闘争に参加する諸パワーは国家や階級のみならず多種多様な運動の主体（エージェント）とそのパワー（エージェンシー可能性）なのである。歴史的条件のもとでリフレクシヴに諸規則および諸資源を動員する人間，すなわちパワーを発揮する人間が，結局は意図せざる帰結として社会変動を生み出さざるをえないというギデンズ社会理論の基本原理が，進化論や必然論を否定する根拠になる[8)]。

8）リフレクシヴな主体という認識を含めたギデンズのリフレクシヴィティ論の全容については宮本（2000）が詳しい。

以上で紹介したギデンズの国家論を基軸にした社会変動論は，Giddens（1985＝1999）において国家パワーの生成論として一層明確に展開される[9]。ギデンズはGiddens（1985＝1999）を，Giddens（1981）の第 2 巻として位置づけている。第 1 巻である前書は「パワー，所有，国家」という副題に示されるように，史的唯物論の中心概念のひとつである所有に基づくパワーの重要性を承認しながらも，そこに欠落していたパワー論，特に国家パワー論の充実を図り，独自の世界史の変動理論の提示を目的としたものであった。それを受けて『国民国家と暴力』では，前書ではいまだ不十分であった国家論の一層の展開を図っており，第 1 巻と類似した構成をとりつつも，内容的に一層の洗練を加えた著作となっている。そして 9 年後の 1994 年の Giddens（1994＝2002）はその第 3 巻と位置づけられているが，それは国家社会主義には引導が渡され，資本主義の革命的パワーを前提にした高度近代（ハイ・モダニティ）の社会システムに対応した新たな社会構想を展開していく出発点となったのである[10]。

おわりに

最後に，本稿の達成点を確認しておこう。第 1 に，ギデンズのマルクス研究が 1960 年代から 70 年にかけて世界で遂行されていたマルクス研究の新しい流れの中で行われていたこと，マルクスの社会理論の基本構成がすでに初期著作に提示されており，その基本構成にマルクス社会理論の諸パートが位置づけられると洞察していたことを紹介できた。ギデンズのその後の社会理論の展開の原点はまさにそのマルクス研究にあったのである。第 2 に，ギデンズの階級構造化論が十分にマルクス研究を踏まえたうえで，階級構造が存在するかしないかといった不毛な議論に終始していた状況を克服する方途を

9）『国民国家と暴力』の概要は宮本（1998：60−70）で紹介した。
10）Giddens（1994＝2002）の概要は宮本（1998：140−63）で，またGiddens（1998）およびGiddens（2000）で提示されたギデンズの新しい社会の構想のその後の展開については宮本（2007）で紹介した。

明示し，各国の社会について一層生産的な階級構造論を展開しうる可能性を開いたことを改めて確認できた。ギデンズはマルクスの階級構造論の原理的立場を基底に据えつつ，経験的な階級構造論を各国の現実に即して展開する道を指し示したのである。第 3 に，やはりマルクスの史的唯物論の原理的立場を受け継ぎながらも，それを国家パワーを中軸とした諸運動のパワーが絡み合い展開する世界社会の歴史的な変動過程において位置づけえたことを明らかにできた。近代社会の変動の推進力には，世界システムにおいて展開する資本主義の革命的パワーだけではなく，資本主義のダイナミクスに直面しつつ活動する国家のパワーや諸運動のパワーも含まれるのである。

さて，本稿が掲載される『桃山学院大学社会学論集』第 49 巻第 2 号は，本学社会学部の鈴木富久教授の退任記念号である。鈴木教授とはこの四半世紀，社会学部の同僚として親しくさせていただき，その研究からも多大な教示を得てきた。鈴木教授の研究テーマはイタリアのマルクス主義の社会理論家アントニオ・グラムシであり，鈴木教授は誠実で勤勉な研究者として単著だけでも三冊のグラムシ研究を上梓されている。グラムシ社会理論についてギデンズの言及は少なく，まとまったグラムシ論を見ることはできないが，ヨーロッパの社会理論にグラムシが与えた影響は大きく，本稿が明らかにしたギデンズのマルクス研究の方向性はグラムシのそれと大きく重なっているようであり興味深い。本稿を鈴木教授退任記念号に寄稿させていただくのはそのためでもある。鈴木教授の今後のご健勝を祈念申し上げる。

参照文献一覧

Giddens, A., 1971, Capitalism and Modern Social Theory, Cambridge University Press.（＝1974，犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社。）

————, 1973, Class Structure of Advanced Societies, Hutchinson.（＝1977，市川統洋訳『先進社会の階級構造』1977 年，みすず書房。）

————, 1979, Central Problems in Social Theory, The Macmillan Press.（＝1989，友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』，ハーベスト社。）

————, 1981, A Contemporary Critique of Historical Materialism, The Macmillan Press.

————, 1985, Nation-State and Violence, Polity Press.（＝1999，松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房。）

————, 1994, Beyond Left and Right:The Future of Radical Politics, Polity Press.（＝2002，松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて』而立書房。）

————, 1998, The Third Way:The Renewal of Social Democracy, Polity Press.（＝2002，佐和隆光訳『第三の道』日本経済評論社。）

————, 2000, The Third Way and its Critics, Polity Press.（＝2003，今枝法之・千川剛史訳『第三の道とその批判』晃洋書房。）

千石好郎，1997，『社会体制論の模索――パラダイム革新への助走』晃洋書房。

千石好郎，2009，『マルクス主義の解縛――「正統的な科学」を求めて』ロゴス。

田口富久治，1994，『近代の今日的位相』平凡社。

田口富久治，1995，『解放と自己実現の政治学：マルクスと共に，マルクスを超えて』近代文芸社。

宮本孝二，1998，『ギデンズの社会理論――その全体像と可能性』八千代出版。

————，2000，「社会学とリフレクシヴィティ」『ソシオロジ』45 巻 1 号。

————，2007，「『第三の道』の社会理論」『桃山学院大学社会学論集』41 巻 1 号。

————，2009，『社会理論 25 講』八千代出版。

————，2011，『吉本隆明の社会理論』晃洋書房。

————，2012，「ギデンズとサッチャリズム―社会理論と社会変動」『桃山学院大学社会学論集』46 巻 1 号。

Giddens' Studies on Marx's Works : Structure and Change of Modern Societies

MIYAMOTO Koji

The works of Karl Marx (1818–1883) have exerted an extraordinary influence over the development of modern social theory. This paper, the third one of my project 'Giddens and Sociologists', aims to explore how Anthony Giddens, one of most famous sociologists in the contemporary world, interpreted, revised and enlarged Marx's social theory through studying his works. The main findings are as follows.

First, through interpreting Marx's works, Giddens found the basic construction and contour of Marx's social theory in his early works. His social theory is constructed on the basic theory of nation-state and capitalism. Second, by revising Marx's class theory, Giddens formed the theory of class structuration. According to the theory of class structuration, the class structure is produced not only by the relations of production but also by the other socio-economic factors and it includes not only socio-economic class but also political class or elite. Third, by introducing the theory of power, Giddens enlarged the historical materialism which is Marx's theory of social change. Driving forces of modern social change are powers of states and movements as well as revolutionary power of capitalism developing in the global systems.

Keywords : Giddens, Marx, class structuration, historical materialism, nation-state